『鍵』とフランス映画

――谷崎潤一郎の作品製作上の一つのパターン――

小出博

一

結論を先に言うと、拙稿は、谷崎潤一郎の近年発表した小説『鍵』が、作者自身が観て感銘を受けたフランス映画『悪魔のような女』から重要な暗示を受けて成立したとする推論であって、断わって置きたいのは、人物のモデル考証とか、日記文体の採用の動機を調べるとかいった方面とは一応無縁であることは勿論、『鍵』がまた、この映画の翻案だなどというつもりはさらさらない。

次に、わたくしの推論を下した動機を述べることによって、この二つの作品の因縁が生ずるための客観的条件としたい。（直接谷崎氏に確かめていないので……）。

わたくしは先ず、この二作の間に、潤一郎の『過酸化マンガン水の夢』という作品を介在させる。この作品は、昭和30年11月の中央公論誌上に掲載されたもので、『鍵』は翌31年1月から同誌上に連載されているから、前者は後者の前々月発表ということになる。この『過酸化マンガン水の夢』という自己の随想風な日記体の小品で作者は、同年8月9日の熱海から上京の際に、『悪魔のような女』という映画を日比谷映画劇場で観たことを記し、続いて、その感想乃至批評が文中で異常なまでに熱心に語られ、帰宅後もその感銘から所謂、「過酸化マンガン水の夢」なる幻想にまで発展する。わたくしは、中央公論誌上では気軽な気持でこの作品に接したが、後に同社から出た『谷崎潤一郎全集』第28巻でこれを読み返えした時にオヤ！ と思った。一つには、その28巻の巻頭に『鍵』が収録されていて、続けて読まされたという偶然にもよる。

わたくしの頭には、すぐこの作者の、『春琴抄』とトマス・ハァディの『グリーブ家のバーバラ』の関係が思い浮かんだ。この二作の関係について、わたくしは、かつて昭和25年5月の、東京堂で出していた『明治大正文学研究』第3号に載せたわたくしの最初の「谷崎潤一郎論」で触れ、近くは、昭和女子大学「光葉会」が出している『学苑』35年4月号に、太田三郎氏が「トマス・ハーディと谷崎潤一郎」で精しく比較文学的検討を加えている。しかしいずれも潤一郎の著作から直接見分けたのではなく、潤一郎と

生活的にも関係の深い佐藤春夫が、昭和9年1月号の『文芸春秋』に載せた「最近の谷崎潤一郎を論ず」――春琴抄を中心として――と題する潤一郎論の中での証言を孫引きの立論である。春夫が二作の関係を潤一郎自身に確めたところ、果してその推察通り関連があったわけで、潤一郎が言うには、ああした場合、美貌が醜悪に変わるのが、日本人だったらどうするであろうかと仮定をすすめ、また、男と女とを取り換えてみたりするうちにあんなふうにできてきたと記されている。この谷崎流の作品製作上のパターンが、今度の推論をすすめうる実は重要な骨子を成すのである。

話をもとに戻すと、潤一郎全集の解説で伊藤整氏も、この『過酸化マンガン水の夢』という作品が、「多分これは小説か戯曲が成立する一歩手前でとどめられた特殊な作品」と云い「心理的感覚的に潜入し、幻想の造型をする」潤一郎風の創作過程を示すものと、さすがに現役の作家らしい口吻で述べている。但し、『鍵』との関係については一言も触れていない。

ここいらで、潤一郎の映画というものとの関係に注目してみよう。御承知のごとく、昔大正9年5月に大正活映という映画会社が創られたとき、潤一郎は招かれて脚本部顧問となり、脚本を執筆したのみならず、更に自ら他の作品を脚色製作するなど、大正10年11月まで、わずか一年あまりの関係ではあるが、映画を単に鑑賞するに止まらず、映画界の内部に入って行って、自らの創作慾を映画のメカニズムを通して試みた小説家であることだ。これは日本の純文学畑では希有な例で、演劇においては演出する作家が稀れではないが、映画に、原作やシナリオを与えるのみならず製作にタッチしてしかも演出、監督までもやった小説家は、最近の石原慎太郎以外、わたくしは知らない。（三島由紀夫は俳優にまで手をつけたが……）だから、重要なことは、作家潤一郎にとって、映画芸術は別世界のものではなく、少くも彼の頭では、映画と小説とは同一平面上に観念されている、親近性をもつと考えられる。この老作家が、いまだにしばしば好んで映画評の筆を執ることがあり、撮影技術にまで立入るいわば玄人の目を持ついわれは、すでに自明の筈なのだ。

二

では一応、映画『悪魔のような女』について紹介しよう。

原題は“Les Diaboliques”製作会社はフランスのフィルム・ソノオル。「恐怖の報酬」に次ぐアンリ・ジョルジュ・クルウゾオが監督したフランス的推理のスリラー映画で、潤一郎が日比谷で観た年の昭和30年、すなわち一九五五年度の作品である。筋を伏せた宣伝と、シモーヌ・シニョレの魅力が評判だった。原作はピエル・ボワロオとトオマ・ナルスジャックが合作した探偵小説ということになっているが、クルウゾオとジェローメ・ジェロミニの共同脚色では、おそらく、クルウゾオ流に大分変えられていようし、潤一郎の感銘は映画から直接受けたものであるから、原作の小説は今問題にせず、映画の梗概だけを、一九五五年八月上旬号の『キネマ旬報』の紹介欄から抜いて、次に記すことにする。

【梗概】妻クリスティナ（V・クルウゾオ）の財産で、パリ郊外の小学校の校長に納まっているミシェル（P・ムウリッス）は、

妻に教鞭をとらせ、もう一人の女教師ニコオル（S・シニョレ）と公然と通じていた。乱暴で利己的な彼に対して二人の女はついにがまんができなくなり、共謀でミシェル殺人の計画を立て、三日間の休暇を利用してニオールのニコオルの家へ行き、電話でミシェルを呼んだ。いざとなるとクリスティナは怖気づいたが、気の強いニコオルは、彼女に命令してミシェルに睡眠薬入りの酒を飲ませ、寝こんだところを浴槽につけて窒息させた。翌朝二人は死体を用意して来た大きなバスケットに詰め、小型トラックで学校まで運び、夜の闇に乗じて死体をプールに投げこんだ。校長の失踪はたちまち校内の話題となったが、ニコオルは平然としていた。プールに飛びこんだ生徒が校長のライターを発見し、プールの水を干すことになったが、水を干してみると、死体は影も形もなかった。しかも、つづいて、ミシェルが殺されるとき着ていた洋服がクリーニング屋から届けられる事件が起きた。クリスティナは洗濯屋から依頼人の住所を聞き、そのホテルへも行ってみたが、そのとき止宿人はいなかった。安心できぬクリスティナは、校長に似た溺死体がセエヌ河に浮かんだという新聞記事を見て、死体公示所へ行ったが人違いだった。公示所でクリスティナからおおよその事情を聞いたフィシェ老警部は、学校に来て調査をはじめた。モワネという生徒がガラスを割って校長に叱られたといい、学校で記念撮影をしたところ、校長らしい人物が写真の中に写っていたりして、クリスティナは恐怖のあまり持病の心臓病が悪化して寝こんでしまった。ニコオルは学校を辞めて行った。その夜、一人で寝ているクリスティナを脅かす足音が聞えて来た。動てんした彼女は廊下から部屋へ足音を追って浴室に来ると、浴槽には殺したときそのままのミシェルが沈んでおり、それが動き出したため、彼女は恐怖のあまり発作を起して絶命した。この大芝居はミシェルとニコオルが共謀して打ったものであった。事成れりとほくそえむ二人はフィシェに捕えられた。事件は解決した。しかし、モワネは、今度はクリスティナ夫人に会ったといっている……。

次に『鍵』は、随筆風な小品を別にすると、昭和24年の『少将滋幹の母』以来の潤一郎の長編大作で、31年1月に第一回が発表されると、潤一郎近来の古典的世界に幻惑されていた世人は、この七十翁の大胆な肉体描写に騒然として、終には議会の問題にまでなったことは、記憶に新なところである。昭和35年のたしか9月頃、ラジオで中央公論社長島中氏と文芸春秋社の池島氏とが聞きてになり、潤一郎の談話が放送されたとき、作者は『鍵』の執筆に触れて、あまり騒ぎがえらいので、執筆を止めようかと思ったと言い、途中で計画を変えたから、二、三回ぐらいまでとその先とは心構えが違ったものになっている、最初の計画通りだと引張られることになったかも知れないと、重要なことを話している。それがどういうものだったかは聞いていない。ともあれ、二回目の発表は飛んで5月からはじまり、同年12月まで、都合九回で完結。豊艶な棟方志功の挿画も物議をかもすのにずいぶんあずかっているかと思う。それで、35年6月、東京堂発行の『日本文学鑑賞辞典』近代篇にわたくしが書いた潤一郎の項から、『鍵』の梗概を抜いて左に記そう。

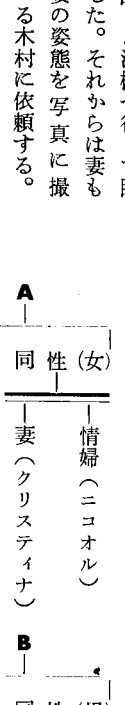
【梗概】この小説はすべて、夫婦の性生活を中心に、その日記を組み合わせた形式をとり、先ず一月一日の夫の日記より始まる。大学教授の夫は今年五六才の老人だが、若い時から女体愛撫に強い執着を持っている。そういう夫に対して、四六才の妻郁子は、未だにみずみずしい肉体を持つ美人なのに、京都の旧家に育ち、女大学流の貞女に訓育されていて、裸体すら夫に見せようとしないはにかみやである。そのくせ精力絶倫で、すっかり夫の体力を消耗させている。あるとき夫は、妻が酔うと浴槽へ行って眠るのをみて、寝室に運んでその裸体を愛撫した。それからは妻も酔ったふりでこれが繰り返えされる。夫は妻の姿態を写真に撮り、現像を門下生で妻君も好もしく思っている木村に依頼する。木村は娘の敏子にめあわせるつもりで出入させている男だが、郁子の方へ魅かれていて、写真がきっかけとなり、郁子と木村は「ギリギリの一線」まで進んで行く。嫉妬深く占有欲の塊みたいな夫は、実は嫉妬の種を好んでまき、むしろ被虐的苦痛を楽しんでいる。その後、夫は無理な行為のために高血圧で倒れ（のちに五月二日に脳溢血で死ぬ）、妻も肺結核を再発させるという五月一日の郁子の日記で物語は一応終る。そして、後日譚とも言うべき郁子の日記（六月九日――一一日）の中で、ドンデン返しの手法で、実は夫の病死が、巧妙な妻君の謀殺であり、愛人木村と娘とを偽装結婚させることまでも予定されていることを、読者は彼女自身の筆によって知らされる。

三

二つの梗概を読んだだけでははっきりしないから、次には構想を分析してみよう。

わたくしが立てた二作間の図式は、主として、人物の性別・性格・行動の転置、乃至は筋の展開ぐあいや、場景や、小道具などからの暗示とその変容をさす。便宜上、『悪魔のような女』をA、『鍵』をBとし、解説を加えることにする。

(1) 共謀



【解説】A・B最初の設定は、Aは夫の吝嗇（りんしょく）と悪虐に悩む妻、Bは妻の古風な潔癖への不満と絶倫な体力とを同時にかこつ夫となっている。そして、Aは単なる三角関係が前からあって、性格の強いニコオルが、消極的なクリスティナを使嗾してミシェルを謀殺したと見せ、Bは潤一郎らしく、夫が老年のあせりから妻を酔わせて意識不明にし、その裸体を唯美主義的に賞翫し、欲望をかり立てるために嫉妬の刺戟を得ようと郁子に木村を近づける。この三角関係は後から計画されたものである。今図形化したA・Bを較べてみると、行動の対象の夫を妻に置き換え、女性同志の共謀を男性同志の共謀に置き換え、行動面で

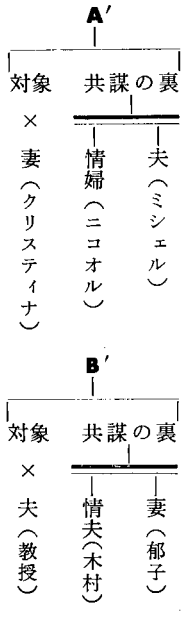
イニシアティーヴを取る情婦・情夫の立場がやはり置き換えられている。

そして、ここで最も暗示的な影響は、浴室の場景が重要なイメージを残していることだ。ニコオルがクリスティナをしてウィスキイに強烈な睡眠剤を混ぜてミシェルに飲ましめ、昏睡したミシェルを「二人」が抱きかかえて「浴槽」に沈めて窒息させるのに対し、こちらは、すなわちBでは不自然さを少くするため数回に場割をしていて、それを総合すると、木村を招いての酒宴において、クリボァジェというブランデーを郁子が木村から強いられて悪酔いし、便所から浴室へ一人で行って「浴槽」の中で酔いつぶれているのを、夫と木村の「二人」がみつけて抱きかかえて寝台に運ぶ、逆の手順になっていることだ。

この場合、同じく浴室でも、スリラー映画であるAが、ニコオルがミシェルを水中に押しこんで窒息させる残忍な場面であるのに、Bにおいてはその性質上、酒に酔いつぶれたシミ一つないまっ白で豊艶な裸体になっていることにはいわれがある。実は『過酸化マンガン水の夢』において、この映画を観る前日（8月8日）、潤一郎は日劇小劇場のミュージック・ホールで、丸尾長顕作という「誘惑の楽しみ」全20景を観ていて、この時以来、ヌード・ダンサーの春川ますみを彼はひいきするようになるのだが、特に第16景「裏窓」という場面は、入浴中の春川ますみの体を窓越しに見る老人という設定で、潤一郎はその印象を細かく記している。そしてまた、翌9日の『悪魔のような女』を観ての帰途、大丸百貨店地階の「辻留」（有名な京風料理の店）で、好物の牡丹鱧を食べて熱海の家へ帰っていく。その夜の夢で――、「鱧の真白な肉とその肉を包んでゐた透明なぬる〳〵した半流動体。それがまだそのままで胃袋の中で暴れてゐるやうに思ふ。鱧の真つ白な肉から、浴槽の中で体ちゆうの彼方此方を洗つてゐた春川ますみの連想が浮かぶ。葛の餡かけ、……ぬるぬるした半流動体に包まれてゐたのは鱧でなくて春川ますみ、……いや、いつの間にかドラサール学園の校長ミシェルが浴槽にゐる。シモーヌ・シニョレの情婦がミシェルを水中に押しこんでゐる。ミシェルはもう死んでゐる。濡れた髪の毛がぺつたりと額から眼の上に蔽ひかぶさり、その毛の間から吊り上つた大きな死人の眼球が見える。」ということになる。

すなわち、鱧→春川ますみ→シモーヌ・シニョレなのであって、場景における記憶の残像は浴室なのだが、夫ミシェルを妻郁子に入れ替えると同時に、シモーヌ・シニョレの情婦ニコオルの、無表情でいて「残忍な感じのする風貌」が気に入って、これが春川ますみの体と鱧のぬるぬるした真っ白な肉とに合体して、郁子の肉体と性格とが形成されたものと言えよう。

(2) 展開と結果



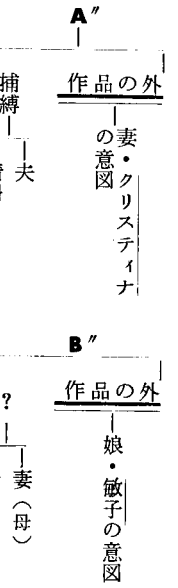
【説解】(2)は作品内での,トリックの展開とその結果である。

AすなわちA'には元来利慾が根本にあって、実は夫の謀殺が偽装殺人と再転し、妻クリスティナのショック死に至るまで、気弱な妻君をおびやかす戦慄的なサスペンスが次々と重ねられていく。BすなわちB'はマゾヒズムの愛慾が基調で、偽装恋愛の刺戟による耽溺が、夫である教授を脳溢血で死なせ、再転して、妻郁子の後日の日記から、偽装恋愛が今一つ偽装であり、実はすでに二人が一線を越えていて、夫の死は妻君の周到な計画による手を下さざる殺人であったことが判明する。

図形的にはすなわち、A・Eそれぞれの共謀の裏が、A'では夫と情婦との計画であり、B'では妻と情夫との計画であり、作者は、A'では妻のショック死に日頃の心臓病を伏線として用意し、B'では夫の脳溢血による頓死に日頃の高血圧症状を伏線に用意している。

また、小道具とも言うべき「カメラ」と「カギ」が、AよりもさすがにB'において更に意味深く使用されている。すなわちA'でのカメラは、サスペンスの一つであるところの、生徒の卒業記念写真の背後に、死んだはずの校長ミシェルの姿を写し撮るが、これはすぐトリックだと読者に判る。B'のカメラはすでに表のBよりして夫と木村とを結ぶ要素として使われ、B'では妻と木村の関係において、一線を越えさす重要なポイントとしての役目を荷っていることだ。カギは、A'では投げこんだ死体の沈んでいるはずのプールの水を干させる役目をさせているが、B'では夫婦の秘密の日記を入れる場所の鍵として、この作品を支える重要なモメントを持っている。

(3) 真相の覗かせ方



【解説】かくされている真の構図である。

A''ではフィシェ警部による夫と情婦との捕縛後、絶命して運び出されたはずのクリスティナが生きて戻っていることを、生徒のことばによってさとらせて終っている。さて、この場合、死人が息を吹き返えして帰って来たのなら、単なる僥倖を無能にも投入したお伽譚となり、心臓病を装っていたとすれば、医師とも結託していたという伏線がどこにも張られていぬ怠慢のそしりを免れ得まい。誰も死なぬのはめでたき限りながら、まったく興味索然たる捕りもの帖だ。要するに、クリスティナの二重人格のトリックに無理がある。潤一郎の感想にも、故意か見落しか、クリスティナは本当に死んだと解釈されていて、また「何より校長と情婦とがそんなヤヤこしい手数のかかる方法で細君を謀殺し、それが発覚しないで済むと思ってゐたのが可笑しい。それならいっそ最後まで発覚しなかったことにした方が、まだ芝居になりそうである。」と言い、不自然な個所を数

ヵ条に渉って指摘している。

ともあれ、『鍵』における潤一郎は、馬鹿馬鹿しく人を殺したり生かしたりせず、今一人の主要人物をかげに設けて、こうした不自然さをまぬがれている。敏子の設定である。だから、ある意味において、B″はA″と同じ効果と言えるけれど、A″のクリスティナには人格的に二重性を持つ何らの伏線も用意されていないのに対し、B″はすべて母郁子の「後日の日記」で推測されるごとく、娘敏子の並々ならぬ奇怪さを読者は思い当らせられるという複雑さである。母は娘と木村を偽装結婚させて、うまく木村を自分に確保できるつもりらしいが、かねがね郁子自身も疑っているように、実は母より数等隠険なこの娘が木村をあやつっているとすれば、すでにA′あるいはAあたりから、木村との共謀の線が——敏子と木村の手筈が——用意されていたのではないかという余韻を残してこの作品は終っているのだ。そうとして今一度最初から『鍵』を読み返えすと、憎悪する父を殺す手伝いをしたこの狂言廻しは、この作品のかくれた真の主人公である、とすら想わせ、父の死後一たんは馬鹿な顔をして母と木村の好きなようにさせて置き、同じく手を下さずに母を殺し、しまいには木村をさえ無きものにしてしまうのではあるまいかと、いう幾重にも底のある無気味な個性を時折ちらちらさせて、潤一郎自身、非常に注意して目立たぬように伏線を張っているのに気付くのである。

この娘の造型と、父なる教授がすべてを知りながら謀殺されて行く実はマゾヒスティックな「自殺」の心境こそ、潤一郎が最も書きたかったものである筈だ。

さて、思うに谷崎潤一郎は、『悪魔のような女』という単なる推理映画、人物の性格とトリックに不自然な欠点のある二流映画を、独特な思考過程を経て自家薬籠中にとりこみ、他殺が自殺を意味し、全き不貞が全き貞女を意味し、行為と心理の二律背反という、敏子をも含む女性心理の複雑な揺動を定着せしめる不変の主題を作品に仕上げ、死と性の意味するものに問題を提起したとわたくしは言いたい。世評の俗声も次第にそこに推移しつつあるようだ。

但し、この作品の欠陥は、よしんば幾重にも解釈しうる日記体の主観性を活用したと言えなくないにせよ、文章の叙述のあまりのくどさ、朧化を目的のあいまいさ、たどたどしさが、作者のことばではないが、あまりにも「ヤヤこしい」し、馬鹿々々しくもなる点にあるようだ、と蛇足を加えておこう。

○後書き……拙稿は昭和35年10月30日に、早大国文学会研究発表会において発表したものに加筆した。従って、以後の諸論の如何に拘らず、二作の関係について論じた最初は小生以外にない。念のために記しておく。また、私が観た筈の映画『悪魔のような女』では、たしか犯人二人の捕縛のカットで終っていたと記憶するのだが、『キネマ旬報』の梗概に拠って分析をすすめたことをお断わりしておく。（稿者）